

---

# FLORA KANAGAWA

Mar. 3, 1993 No. 35

神奈川県植物誌調査会ニュース第35号

〒231 横浜市中区南仲通 5-60 神奈川県立博物館内 神奈川県植物誌調査会  
TEL 045-201-0926・振替 横浜 3-10195

---



マネキグサ

三浦半島野外研究会にて

## 目 次

勝山輝男：神奈川県産スゲ属植物補遺	380
奥津 均：キダチタバコ	381
奥津 均：白花のもの三題	382
鈴木美恵子：三浦半島野外研究会報告	383
田中徳久：舞岡谷戸の植物	384
1991年度各メッシュ追加植物リスト 最終回（県立博物館分）	386

## 神奈川県産スゲ属植物補遺

(勝山輝男)

### 1. イセアオスゲ

筆者が「神奈川県植物誌1988」でハガクレスゲ *Carex jacens* としたものはイセアオスゲ *Carex karashidaniensis* Akiyama であることが判明した。詳細は神奈川県立博物館研究報告21号(1992)に報告した。

イセアオスゲは伊勢の唐子谷で採集された標本に基づいて秋山(1937)により記載されたが、秋山(1955)「極東亜産スゲ属植物」に図と記載が載っている他には、杉本検索誌に名前が出ているくらいで、その実体はよく理解されていない。

イセアオスゲは形態的にはハガクレスゲに似ているが、葉が花茎よりも著しく高いこと、果胞は長さ3~3.5mmあり、有毛で細いが明らかな脈が多数あり、嘴が長く先が鋭く2裂すること、そう果の円盤状の付属体が大きいことなどで区別できる。

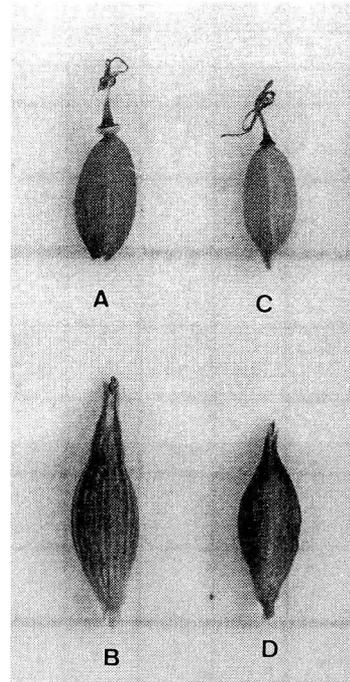
ハガクレスゲは果時に葉が花茎と同長かやや短く、果胞は長さ2.5~3mmと小さく、果胞の脈は不明瞭で無毛または微毛があり、果胞の嘴はあまり長くのびない。そう果の円盤状の付属体もイセアオスゲのように大きくはない。これらの諸点に注意すれば、イセアオスゲとハガクレスゲを区別するのは容易である。

標本で確認できた産地は丹沢の他に、東京都(奥多摩)、静岡県(安部奥、寸又峡)、山梨県(御座石鉱泉付近)、三重県(一志郡美杉村、伊賀北山峡)である。ハガクレスゲが本州中部の日本海側から北海道にかけての針葉樹林帯に分布するのに対し、イセアオスゲは本州の太平洋側山地のシイ・カン帯上部からブナ帯の林床に生えるようだ。

### 2. コハリスゲ、ヒカゲハリスゲ、ハリガネスゲ

県立博物館所蔵の各地のコハリスゲ *Carex hakonensis* Franch. et Savat. とヒカゲハリスゲ *Carex onoei* Franch. et Savat. の標本を整理しているときに、神奈川県植物誌でコハリスゲとしたもののなかにもヒカゲハリスゲが含まれていることに気がついた。

ヒカゲハリスゲは果胞に細脈があり、嘴が長く、口部が小さいがはっきりとした2歯となる。一方、コハリスゲの果胞はほとんど無脈で、嘴も短く、口部も2歯にならない。花茎の上部もヒカ



イセアオスゲの果実(A)と果胞(B)  
ハガクレスゲの果実(C)と果胞(D)

ゲハリスゲではかなりザラつくが、コハリスゲではほとんどザラつかない。葉の幅もヒカゲハリスゲではやや広く、コハリスゲではきわめて狭い。

これらに注意して神奈川県産の標本を再チェックしたところ、丹沢産のものはすべてヒカゲハリスゲであった。箱根産のものは駒ヶ岳周辺の草地に生えるもののみがコハリスゲで、箱根芦の湯と精進池産の2点はハリガネスゲであった。

ハリガネスゲ *Carex capillacea* Boot はよく生長したものでは小穂が細長く、雄部もよく発達するので、外見だけでヒカゲハリスゲやコハリスゲと区別できる。しかし、生育の悪いいじけた個体では見誤る可能性も多い。ハリガネスゲでは生育の悪い個体の小穂でも雄部が比較的長いこと(コハリスゲやヒカゲハリスゲの雄部はきわめて短い)、果胞はゆるく果実を包み、かなり太い脈があること、花茎が滑らかであることなどで区別する。神奈川県では三浦半島と箱根に産し、箱根には多産する。

各地のコハリスゲの標本をチェックしたところ、コハリスゲは亜高山帯針葉樹林からハイマツ帯の林床や草地に生えるもので、箱根のような低山地に生えるものとは生態が異なるように思えた。あるいは箱根のコハリスゲは亜高山帯や高山

帯に分布するものとは異なるのかもしれない。

尚、ハリガネスゲは湿地の植物であるが、コハリスゲやヒカゲハリスゲは沢筋や湿った斜面に生え、湿地の植物とはいえない。コハリスゲは亜高山帯に、ヒカゲハリスゲはブナ帯に分布する。

### 3. マメスゲ *Carex pudica* Honda

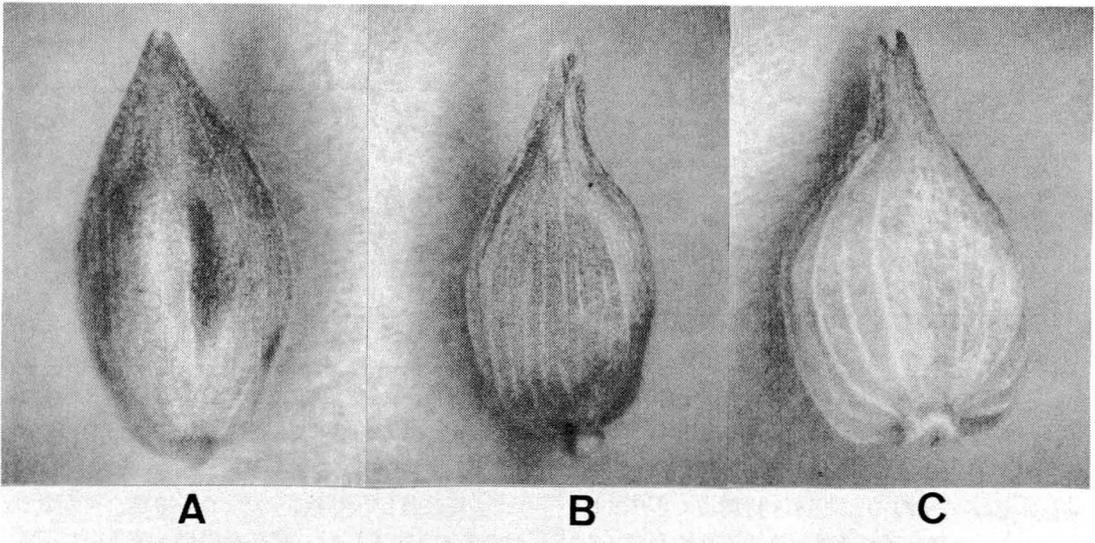
すべての雌小穂が根際にかたまってつき、雄小穂だけが抽出する。箱根仙石原の湿地林で採集された。神奈川県新産。5月中旬頃には葉がそれほど伸びていないので、容易に小穂を見出すことができるが、時期が遅くなると、葉が伸び、見つけにくくなる。

### 4. ヤガミスゲ *Carex maackii* Maxim.

1958年版の神奈川県植物誌に横浜、鎌倉の記録が出ているが、1988版の植物誌調査では採集されていない。今回、浜中義治氏が金沢区富岡東の草叢で採集された。河川敷などの湿った草地に生える種類である。

### 5. タチスゲ *Carex muclata* Boot

1958年版の神奈川県植物誌には横浜の産地が出ているが、やはり今回の調査では採集されていない。県立博物館所蔵のスゲ属植物をチェックしていた所、大場先生が川崎市登戸で採集された標本を見出すことができた。(相模登戸, 1953.4.15, 大場達之, KPM 12577)



A: コハリスゲの果胞 B: ヒカゲハリスゲの果胞 C: ハリガネスゲの果胞

## キダチタバコ

(奥津 均)

鎌倉市のキリスト教会の一隅に見なれぬ木があります。ある年は伸びるにまかせ5mにもなった高木ですが、材は柔らかく、手で折れるほどで、毎年秋の台風では、地上1.5mから上部は全部折れて、ちょうどクワ畑のクワの木のような姿となります。春になると緑色の枝が斜上し、葉はチョウセンアサガオのように大型で多数が繁り、春から秋まで筒状の黄花を房状に垂らして咲かせます。

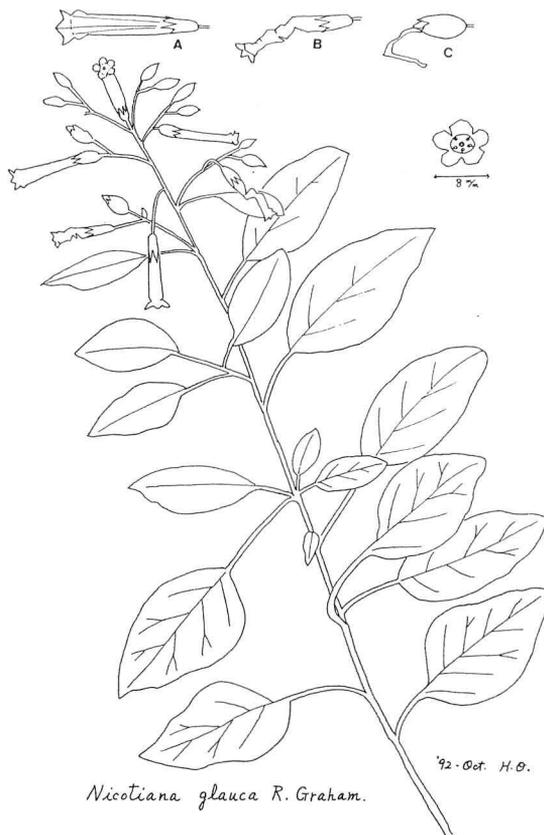
教会の神父さんに会って直接聞きましたところ、自分の出身地の中東より小さい種子を持って

きたもので、日本語でカラシノキ(辛子の木)、英語でマスタード・ツリーと呼び、種子をつぶして辛子に使うとの返事でした。

しかし、このことは勘違いのようなので、自分で調べましたが、どうしてもわかりませんでした。先輩の浅井康宏先生とお会いできる日があったので、花のついた実物をお見せしたところ、即座に「これはニコチアナ」と言われ、びっくりしました。翌日にはハガキをいただき、「学名は *Nicotiana glauca*。我国には大正の中頃に渡来、原産地は南アメリカ(アルゼンチン・ボリビア・パラグアイ)で観葉植物として栽培されています。英名はツリー・タバコ;メキシカン・タバ

コで、和名はキダチタバコと確認し、同定します。」とのことでした。

花は筒状で長さ2.5cm、黄色(A)、先は5裂するが深く切れない。花は開花後1~2日でしおれ、不規則にくびれながら委縮し(B)、子房はその後ふくらみ、萼より少し出る(C)。その頃花冠は乾燥状態となり、茶色に変色し萼片と子房にはさまれたままくっついた後、しばらくして落下する。果実が不稔のためか、または日本の寒さに合わないか、理由はわからないが、実生を見ていない。果実が緑色の時に標本にし、微細な種子多数を得る。日本各地にあるようだが、神奈川県では初めてなので、標本と図を提出して報告します。



## 白花のもの三題

(奥津 均)

### 1. キランソウ

1992年4月23日、奥津が主宰する野草観察会が横浜市緑区寺家町のふるさと村周辺でありました。ここは多摩丘陵が東端で終る位置にあり、タマノカンアオイのあるところです。

田のあぜにキランソウの大群落があり、「ここのはずいぶん紫色が濃いねえ」と言いながらそばへ寄ると白花がありました。つるをひくものなので表現は難しいですが、だいたい5株に対して1株が白い株でした。写真を提供し報告いたします。



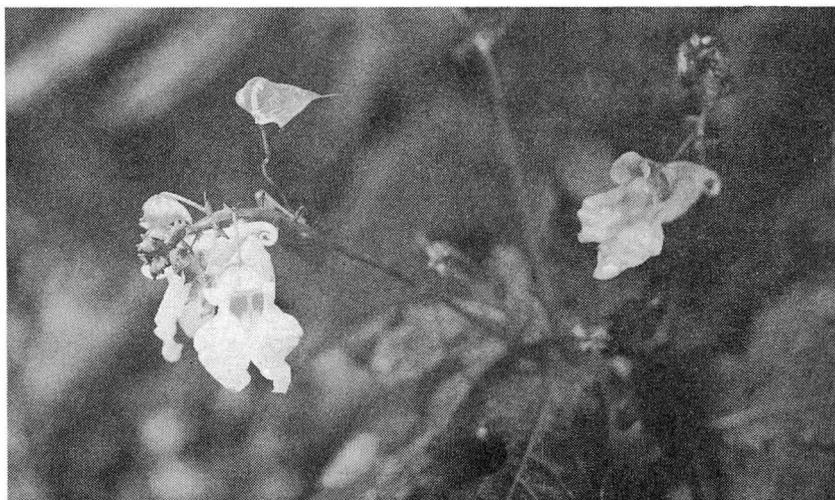
## 2. ツリフネソウ

同年9月15日、県内の薬剤師が会員の艸楽会の例会が足柄峠でありました。ミシマサイコ、キカラスウリ、センブリなどの観察が目的でした。

聖天堂のまわりには、赤花のツリフネソウが一杯でしたが、ある群落では白花が目立ちました。花の中心にある2ヶの黄色の斑はくっきりとあり、他の部分は純白でした。よく観察すると白花品は、花のつく柄は白く、唇弁にあたる下側の萼片は丸みを帯び浅く二裂し、裂片は下側にも垂れ

ず、波状にもひだが入らず、その縁は全縁でした。また、この場所より約100m離れた別の群落では、うすいピンクのものがありました。ここのは赤花の影響が強いためか、萼片は深く二裂し、縁は波状でひだが入り、先端が垂れていました。

[附記] サカタのタネの園芸通信9月号に箱根湿生花園のツリフネソウの記事があり、白花品もあって、それをシロツリフネと呼んでいるようです。



## 3. ヨウシュハッカ

厚木市の荻野の友人より、地元の稲作農家でハッカと呼んで田のあぜで作っているものがあるが、自宅の庭のハッカとは違うという話を受け、9月19日に調べに行きました。突然なので友人は留守で、仕方なく田へ下りたが、どの田を調べたらよいか迷いました。一部では稲刈りが始まっていて聞くわけにもいかず、少し歩いてから一人で仕事をしている農夫に、「このあたりにハッカがありますか」と聞きましたら、「うちの田に一杯あるよ」と案内してくれました。

確かに在来のハッカとは違い、大型で、それも全部が白花品でした。ハッカ属はどれもうすい紫色のものと思っていたので驚きました。自宅へ持ち帰り調べたところ、外来植物でありながら北半球に広く分布するヨウシュハッカ (*Mentha arvensis*) でした。在来のハッカはこれの変種 (var. *piperascens*) で、ヨウシュハッカの主な特徴は葉の柄が長い、茎の稜に下向きの白い毛

がたくさんつくことです。

後日、初山先生に実物を持参してお伺いしたところ、厚木地方の田にあったのは、「どこかの田で栽培されていたものが逃げたのだろう」とのお話でした。

---

---

## 三浦半島野外研究会報告

(鈴木美恵子)

10月3日、私の所属する自然観察グループ「三浦の自然を学ぶ会」の仲間4人といっしょに、逗子二子山周辺(ZU)での野外研究会に参加させていただいた。昨年から変化に富んだ地形と豊富な植物相の二子山にとりつかれて、毎月必ず訪れてきたが、特に9月末に訪れたばかりということもあって、先頭を歩かせていただいた。長柄橋交差点に集合したメンバーは、博物館の先生方の他にも、皆さんエキスパートの方ばかり、今日は日頃の疑問を解くチャンスと、期待で胸が高鳴る。

途中の空地で自己紹介の後、二子谷の中央付近を道路が通る計画がある聞き、とたんに暗い気分となる。湘南国際村の工事に関連して、周辺はすでに十分破壊されたと思うのだが。

大山林道に入っすぐ、休耕田と谷あいの“隠れ田”を観察。いつも私たちが舌なめずりをしながら観察する所である。キカシグサ、ヒメクグ、ヒメテンツキ、ヒデリコ、カワラスガナ、イボクサ（先月はアゼムシロがびっしりだった）、“隠れ田”では県内では少ないウリカワ（花は見られず）、ヤブツルアズキ（残り花と青いさや）、地下茎がからまりあって群落を作っているシロバナサクラタデ（雄株がほとんど）。林道への車止めを抜けると、今年もここで見るネナシカズラ。今まで不明だったイネ科の草がイヌアワ、ネズミガヤ、サヤスカグサだとわかった。そこから奥は、シュウブソウ、ノブキ、ヤブタバコ、イヌショウマ、ミズヒキ、ギンミズヒキが道の両側に点々と続く。サラシナショウマ、キバナアキギリ、フトボナギナタコウジュも。堰堤の奥の川原を臨んで昼食。広い湿地には今花盛りのツリフネソウの大群落。アオチカラシバ。

昼食後は、広い道の行き止まった所で流れを渡

り、右手をしぼらく流れに沿って行く。9月に見たカリガネソウの花はほとんど終わり、代わりにタニジャコウソウの花。あちこち崖が崩れかけて土が露出した所にヤマルソウのロゼットが見える。途中、壊れた巣の近くでスズメバチが威嚇しているのに気づき、迂回して避けるハブニングも。ミツバアケビのちょうど食べ頃の実を収穫しつつ急坂を登る。片側にタニジャコウソウが狭い道を隠すように何株も枝を垂れて咲いている。登り切ったところで花の終わったタムラソウとキクアザミ。ミヤマウズラの花も。急坂を一気に下り、スギの植林を抜け、田浦の谷戸にでる。

山内先生の案内で、もう一つの南の谷戸に引き返して、マネキグサの花を見た。暗い林の入り口にある。暗さの中で、はじめて見る暗紫色の花の色が意外にくっきり見えて、印象的であった。

コースの後半は一人一人がやっと通れる、しかも急坂の道だったので、皆で1つの植物についての情報を得るという場面がとりにくかったのが、残念だった。

名ばかりの会員としての参加でしたが、ずいぶん勉強になりました。どうもありがとうございました。

## 舞岡谷戸の植物—1980年代初め頃の記録—

(田中徳久)

### はじめに

横浜市戸塚区舞岡町には、舞岡谷戸と呼ばれる自然環境に恵まれた農耕地帯が広がっていたが、現在では谷戸の源流域は「舞岡公園」として整備され、一部水田では耕作が放棄されて、自然環境が随分と変化してしまった。

神奈川県立野庭高等学校生物部は、1970年代の終わり頃から1980年代の終わり頃にかけて、同地域を自然観察のフィールドとして活動し、昆虫や蜘蛛、植物の観察・記録を行なってきた。本報では、筆者が高校時代に同部で活動していた頃の記録（1982年度～1983年度）と、筆者が多少なりとも関わった後輩らの記録（1984年度）にいくつかの種を加え、『舞岡谷戸の植物』として報告する。

当時の生物部には、植物の分類を専門に指導して下さる先生もいなかったため、当時の筆者の同定にもいくつかの疑問があるが、明らかな誤同定と思われるものは訂正した。また、明らかに本地

域に生育すると思われる植物のうち、シダ植物やイネ科、カヤツリグサ科の種、さらには木本の種には記録されていないものが多いが、御容赦頂きたい（いくつかの種については追加した）。

### 目録

トクサ科—スギナ。ゼンマイ科—ゼンマイ。イノモトソウ科—ワラビ。オシダ科—ヤマイタチシダ、ベニシダ、コウヤワラビ。

スギ科—スギ。ヒノキ科—ヒノキ。

カバノキ科—ハンノキ、イヌシデ。ブナ科—スダジイ、クヌギ、アラカン、シラカン、コナラ。ニレ科—ムクノキ、エノキ、ケヤキ。クワ科—カナムグラ。イラクサ科—アオミズ。タデ科—イタドリ、イヌタデ、アキノウナギツカミ、ミヅソバ、スイバ、ギシギシ。ヤマゴボウ科—ヨウシュヤマゴボウ。スベリヒユ科—スベリヒユ。ナデシコ科—ミノツヅリ、オランダミミナグサ、ミミナグサ、カワラナデシコ、ノミノフスマ、ウシハコベ、ハコベ。ヒユ科—イノコズチ、イヌビユ。クスノキ科—ヤブニッケイ、シロダモ、アブラ

チャン、タブノキ。キンボウゲ科—センニンソウ、ケキツネノボタン、キツネノボタン、タガラシ、アキカラマツ。アケビ科—アケビ、ミツバアケビ。ドクダミ科—ドクダミ。センリョウ科—ヒトリシズカ。ケシ科—ムラサキケマン、タケニグサ。アブラナ科—ヤマハタザオ、ナズナ、タネツケバナ、イヌガラシ。ベンケイソウ科—コモチマンネングサ。ユキノシタ科—ウメバチソウ。バラ科—キンミズヒキ、クサボケ、ヘビイチゴ、キジムシロ、ミツバツチグリ、ヤマザクラ、ノイバラ、ワレモコウ、コゴメウツギ。マメ科—ヤブマメ、ゲンゲ、ヌスビトハギ、ネコハギ、ミヤコグサ、クズ、ムラサキツメクサ、シロツメクサ、カラスノエンドウ。カタバミ科—カタバミ。フウロソウ科—ゲンノショウコ。トウダイグサ科—エノキグサ、タカトウダイ、ナツトウダイ、アカメガシワ。ウルシ科—ヌルデ。ミツバウツギ科—ミツバウツギ。ブドウ科—ヤブガラシ。スマレ科—タチツボスミレ、スミレ、アカネスミレ、ツボスミレ、ノジスミレ。キブシ科—キブシ、ウリ科—アマチャヅル。ミズキ科—アオキ、ミズキ。ウコギ科—ウド、タラノキ、ヤツデ、キツタ、ハリギリ。セリ科—ノダケ、ミツバ、チドメグサ、セリ、ヤブジラミ。

ヤブコウジ科—ヤブコウジ。サクラソウ科—オカトラノオ、クサレダマ。エゴノキ科—エゴノキ。リンドウ科—リンドウ、フデリンドウ。キョウチクトウ科—テイカカズラ。アカネ科—ヤエムグラ、ヘクソカズラ、アカネ。ムラサキ科—ハナイバナ、ホタルカズラ、キュウリグサ。クマツヅラ科—ムラサキシキブ。シソ科—キランソウ、ナギナタコウジュ、カキドオシ、ホトケノザ、ウツボグサ、アキノタムラソウ、オカタツナミソウ、タツナミソウ。ゴマノハグサ科—ムラサキサギゴケ、トキワハゼ、タチイヌノフグリ、オオイヌノフグリ。キツネノマゴ科—キツネノマゴ。オオバコ科—オオバコ。スイカズラ科—スイカズラ、ニワトコ。キキョウ科—ツリガネニンジン、ホタルブクロ。キク科—ヨモギ、ノコンギク、シラヤマギク、センダングサ、アメリカセンダングサ、シロノセンダングサ、リュウノウギク、ノアザミ、ベニバナボロギク、タカサプロウ、ヒメジョオン、ハルジオン、ヒヨドリバナ、ハキダメギク、ハハコグサ、キツネアザミ、オオジシバリ、ジシバリ、ニガナ、カントウヨメナ、アキノノゲシ、ホソバナアキノノゲシ、コオニタビラコ、ヤクシ

ソウ、フキ、コウゾリナ、ノボロギク、タムラソウ、セイタカアワダチソウ、アキノキリンソウ、オノノゲシ、ノゲシ、セイヨウタンポポ、カントウタンポポ、オナモミ、オニタビラコ。

オモダカ科—オモダカ。ユリ科—ノビル、ヤマラッキョウ、ホウチャクソウ、アマドコロ、ツルボ、サルトリイバラ。ヒガンバナ科—キツネノカミソリ。アヤメ科—ニワゼキショウ。イグサ科—スズメノヤリ。ツユクサ科—ツユクサ。イネ科—カモジグサ、スズメノテッポウ、トダシバ、カラスムギ、ヒメコバンソウ、イヌムギ、カモガヤ、メヒシバ、カズノコグサ、ススキ、チヂミザサ、チカラシバ、ヨシ、アズマネザサ、スズメノカタビラ、エノコログサ。ヤシ科—シュロ。ガマ科—ガマ。カヤツリグサ科—ナルコスゲ、アブラガヤ。ラン科—ギンラン、キンラン、シュンラン、ネジバナ。

## 終わりに

近年、日本各地で自然環境の破壊が叫ばれ、神奈川県下、とくに横浜市内では、異常な速さで自然が失われつつある。舞岡谷戸も例外でなく、本報で報告した植物のいくつかは既に本地域から姿を消している。本報の目録ははなはだ不完全なものであるが、このような状況の中で、本報のような記録を残すことは重要であると考え、あえて報告した。調査会会員諸氏のお役に立てば幸いである。

最後に、当時御指導頂いた、野庭高校生物部顧問の植村明也、田副幸子、谷川明男の各先生と同部植物班の諸先輩、共に活動し、記録を残した、坂口ゆきえ、岡田陽子、東海林百合子、鈴木秀美の各氏に感謝の意を表す。

1991年度各メッシュ追加植物リスト 最終回(県立博物館分)

シソ HAK-1 金時山 浜中義治, MIA-3 塚原 浜中義治  
 レモンエゴマ OD-2 風祭 浜中義治, OD-3 国府津 浜中義治,  
 MIA-3 塚原 浜中義治  
 エゴマ MIA-1 明神林道 長谷川義人  
 イヌヤマハッカ YU-2 鍛冶屋 長谷川義人  
 アキノタムラソウ HAK-5 須雲 内田藤吉  
 ケナツノタムラソウ OD-2 風祭 浜中義治  
 ナツノタムラソウ YU-2 鍛冶屋 長谷川義人  
 キバナアキギリ AT-3 飯山観音 高坂雅子  
 タツナミソウ TSR 獅子ヶ谷 高坂雅子  
 アメリカイヌホオズキ MI-2 赤田 北川淑子  
 イヌホオズキ OD-2 風祭 浜中義治  
 キダチハリナスビ NIS 南軽井沢 吉川アサ子  
 ハダカホオズキ TO-3 横浜自然観察の森 林辰雄  
 タチコゴメグサ FUJ-1 陣馬山 武井尚  
 マツバウンラン KAZ 横浜市大 北川淑子  
 ウリクサ KAW 東扇島 小崎昭則  
 アメリカアゼナ NIS 浅間町 吉川アサ子  
 アゼトウガラシ OD-2 入生田 浜中義治, SA-2 磯部 宮崎卓  
 ヒキヨモギ TO-3 上綱町 林辰雄  
 ビロードモウズイカ KAZ 並木 浜中義治  
 オオカワジシャ KAW 東扇島 小崎昭則  
 タチイヌノフグリ HAK-4 姥子 浜中義治  
 クワガタソウ HAK-4 駒ヶ岳 内田藤吉  
 ムンクサ OD-4 入生田 浜中義治  
 オオイヌノフグリ HAK-2 芦川 浜中義治  
 ゴマ NAK 新港埠頭 吉川アサ子  
 ヤセウツボ KAZ 鳥浜町 浜中義治, MI-1 子供の国 勝山輝男  
 キクムグラ AT-3 田野 高坂雅子  
 オオバノヤエムグラ HAK-1 仙石原 浜中義治  
 フタバムグラ NIS 浅間町一丁目 吉川アサ子  
 ハシカグサ NIS 浅間町 吉川アサ子  
 ハナヤエムグラ NIS 臨港パーク 吉川アサ子  
 ウグイスカグラ HAK-1 仙石原 浜中義治  
 コバノガマズミ HAK-1 仙石原 浜中義治, OD-2 風祭 浜中義  
 治  
 ヤブデマリ TO-3 横浜自然観察の森 林辰雄  
 イワシャジン TS-5 中津渓谷 高橋秀男他  
 ホタルブクロ HAK-2 畑引山 浜中義治  
 タニギキョウ HAK-1 仙石原 浜中義治  
 キキョウソウ KAZ 並木一丁目 浜中義治  
 カミツレモドキ NIS 臨港パーク 吉川アサ子  
 カワラヨモギ TO-3 横浜自然観察の森 林辰雄, TAM 早野 北  
 川淑子  
 オトコヨモギ HAK-4 箱根園 浜中義治  
 オオホウキギク NIS 吉川アサ子  
 ヒメシオン FUJ-1 藤野町 武井尚  
 シラヤマギク MIA-3 塚原 浜中義治  
 ホウキギク OD-2 風祭 浜中義治  
 アメリカセンダングサ MIA-2 明星林道 浜中義治  
 イズカニコウモリ YU-2 鍛冶屋 長谷川義人  
 ノハラアザミ MIA-2 明星林道 浜中義治  
 コスモス KAW 東扇島 小崎昭則 HAK-1 金時山, 浜中義治  
 タカサブロウ OD-2 風祭 浜中義治  
 ヒメムカシヨモギ MIA-2 明星林道 浜中義治  
 ベラベラヨメナ OD-2 風祭 浜中義治  
 ハルジオン HAK-1 仙石原 浜中義治

ヘラバヒメジョオン HAK-2 畑引山 浜中義治  
 アズマギク HAK-5 恩賜箱根公園 武井尚  
 ハキダメギク MIA-3 大雄町 浜中義治  
 アイセイタカハハコグサ KOH 中川町 小崎昭則  
 タチチコグサ KAZ 鳥浜町 浜中義治  
 アキノハハコグサ FUJ-1 陣馬山 武井尚  
 チチコグサモドキ MIA-3 大雄町 浜中義治  
 ウスベニチコグサ ISO 新杉田 浜中義治  
 ウラジロチコグサ OD-2 入生田 浜中義治  
 ヒマワリ NAK 新港埠頭 吉川アサ子  
 ヒメヒマワリ MI-2 赤田 北川淑子  
 キツネアザミ HAK-5 山崎 浜中義治  
 カワラニガナ TS-3 夫婦園 勝山輝男  
 ツルカワラニガナ(カワラニガナ×イワニガナ) TS-3 夫婦園  
 勝山輝男  
 カントウヨメナ MIA-2 明星林道 浜中義治, OD-4 早川 浜中  
 義治  
 アキノノゲシ KAW 東扇島 小崎昭則, MIA-2 明星林道 浜中義  
 治  
 ヤマニガナ OD-2 水之尾 浜中義治  
 ムラサキニガナ TO-3 瀬上市民の森 武井尚  
 コオニタヒラコ HAK-5 山崎 浜中義治  
 マルバダケブキ HAK-1 姥子 浜中義治  
 カミツレ HO 藤塚町 吉川アサ子  
 コシカギク NAK 新港埠頭 吉川アサ子  
 チョウセンシオン YAT 福田 武井尚  
 シュウブンソウ YU-2 鍛冶屋 米山智恵子  
 キヌガサギク MI-1 子供の国 北川淑子  
 コメナモミ HAK-1 金時山 浜中義治, MIA-3 塚原 浜中義治  
 メナモミ HAK-1 仙石原 浜中義治, MIA-3 狩野 浜中義治  
 オオアザミ MIN 井土ヶ谷 鈴木貞平  
 セイタカアワダチソウ MIA-3 塚原 浜中義治, OD-4 早川 浜  
 中義治  
 オニノゲシ HAK-4 芦ノ湯 浜中義治  
 ノゲシ HAK-2 芦川 浜中義治  
 ハバヤマボクチ HAK-1 仙石原 浜中義治  
 セイヨウタンポポ OD-2 風祭 浜中義治  
 カントウタンポポ HAK-1 仙石原 浜中義治, HAK-4 芦ノ湯 浜  
 中義治  
 オオオナモミ MIA-2 明星林道 浜中義治  
 イガオナモミ KAW 東扇島 小崎昭則  
 トゲオナモミ NIS 浅間町 吉川アサ子

編集後記

いつものことですが発行が遅れて申し訳ありません。今年度は2号までしか出せそうにありません。第36号は来年度にまわします。編集担当は田中徳久・勝山輝男でした。